

## 大島正隆研究資料の一つとして

著者	我妻 建治
雑誌名	国史談話会雑誌
巻	55
ページ	40-49
発行年	2014-11-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00129369">http://hdl.handle.net/10097/00129369</a>

## 大島正隆研究資料の一つとして

## 我妻建治

大島正隆（明治四二―昭和一九）は、昭和一九年一月二日、療養先の勝浦で逝去した。この計を、柳田国男は、同一九日、野尻抱影（本名正英、明治一八―昭和五二）の手紙で知らされた。

一月十九日 水よう 晴風ふく  
感冒の用心に半日寢床に居る。戸をあけて日光浴深呼吸。  
幸ひにして訪客無し。

野尻抱影君手紙、大島正隆君死去のよし報じ来りびつくりする。三十五才といふ。此頃久しく消息なくいぶかしく思ひをりし也。

―柳田国男『炭焼日記』―

抱影は、早稲田の英文科出で、本来英語の教師であるが、

星や星座に著しい関心を持ち、後年「星の博士」「星の民俗学者」として世に知られ、柳田には早くから師事していた。抱影と正隆とは叔父・甥の関係にある。抱影は若いころ、甲府中学校の英語の教師であったが、その時の校長が正隆の祖父大島正健で、正健の三女麗が抱影の妻となった。麗が逝去ののち、正健の二女百合が抱影の後妻となる。抱影の実弟大佛次郎（本名野尻清彦、明治三〇―昭和四八）は、兄嫁麗を「すっきりした水晶のような輝きを持つ玲瓏たる美女」（新潮文学アルバム『大佛次郎』）と評している。

さて、抱影が甥正隆に対し、その歴史研究者としての、さらに柳田門下の民俗学者としての素養、力量を如何に大きく評価し、将来にわたって期待するところ多大であったかは、抱影の多くの著述の中にこれを認めることができる。

さしあたり、ここでは、（A）『日本の星―星の方言集』

(中公文庫)と(B)『星三百六十五夜』(上・下)(中公文庫)の抱影の二つの書物から、これをあら／＼摘出してみよう。

(なお、戦前の大佛次郎の著作は、(1)鞍馬天狗、(2)フランス共和制下の一連の著述、(3)時代小説、(4)現代小説、の四つの部分から成るが、(4)の現代小説の中に昭和初期の世相とともに大島正隆のような青少年像が見えかくれしているかもしれないが、これを検出することは容易ではない。)

ともあれ、これらが大島正隆像を作り上げるための一資料ともなれば幸いである。

### (A)『日本の星』

ななつぼし

夜や寒き七つななつの星ほしのすむかたも、むかへるさとも衣うつなり  
(堯孝 南北擣衣)

その他が見えている。終りの歌は、前景の朗詠をふまえていえると思われる。そして、江戸の辞書・節用集、例えば「類聚名物考」天文部の星名にも「北斗星 ななつのほし」と載っている。

ところで、ナナツボシは広くいわれていたと見えて、今で

もほとんど全国で聞かれる。北は青森・岩手から、南は奄美群島のナナトゥブシ、八重山群島のナナチンブシ、チン・ナナチに及んでいる。静岡地方にはナナボシもあるという。俚謡には、

北の子わの星や動かぬ星で、ついてまわるが七ななつ星

(呉市吉浦)

があり、瀬戸内の島々では、「ナナツボシが北ノネノホシを攻めようとするのを、ヤライボシが防いでいる」といつている「やらいばし参照」。

時には、キタノナナツボシと呼ぶ地方があつて、内田武志氏は沼津附近と、青森の下北郡地方を挙げている。わたしの甥(故大島正隆)は隠岐の島とうご後でこれを聞いた。キタノヒトツボシ(北極星)に倣ったものだろう。

しかし、ナナツボシは地方により、スバルの異名でもある。これは肉眼では六星で、普通ムツラボシだが、北斗の名がいつとなしに移ったものかもしれない「すばる参照」。

ヤライノボシ

わたしの甥は、宮城亘理郡荒浜村で、「ヤレーの二つの星

がシツチョーを防ぎながらキタノヒトツのまわりを動いている」と聞いた。この「ヤレー」は、むろんヤライの転訛である。そしてこれを語った老人は、「ヤレーとは通さないことだ」と説明したという。

しかし、甥は岩手九戸郡宇部村で、ヤライノホシと共に、ジャロツボシの名を聞いた。内田氏の採集にもある。これはヤローボシから転じたものだろうと思う。

いかりぼし

それから二、三年する間に、イカリボシの名は方々で聞かれた。静岡市でも焼津町でもいわれていた。丹波の福知山にもあった。福井の坂井郡雄島村では、イカレボシで、送られた図に「六月十日頃、夕、西入れます」とあった。能登でもイカリボシである。わたしの甥は、宮城県宮城郡根白村の、山の出口から最初の家の炬ばたで、二人の老人から、イカリボシを、サンダイショウ（三つ星）、サカマスボシ（オリオ）、ネノホシ（北極星）、ナナツボシ（北斗）、ムツラボシの名と共に聞いてきた。

くさぼし

茨城や静岡地方では多くクサボシだが、東北地方ではオクサボシで、転じてモクサボシという土地もある。わたしの甥が岩手下閉伊郡の炭焼から聞いたのはオークサボシで、「そろツと出る星」といい、同気仙郡で聞いたオクサは、「ちやぐちやぐと光る小さい星の集まりで、いか釣りに重要な星」と説明された。

ともかくオクサボシは、東北地方ではごく普通な名で、スバルにつづいて昇る一等星アルデバランは、一般にオクサノアトボシと呼ばれる（あとぼし参照）。

例えば、甥が岩手九戸郡、同気仙郡で聞いたヤクボシ（役星）は、

一列につづくオクサ、オクサノアトボシ、ムツラ（オリオ）、ムツラノアトボシ（シリウス）

で、また草下英明君が、同気仙郡鹿折村の梅原盛氏から報ぜられたのでは、（下略）

さんだいしょう

しかし、わたしの甥は、かつて宮城県利府村のうどん屋で、サンダイシは「アメリカのイエス・キリストと、日本の

天子さまと、印度のお釈迦さまがならんだお姿」と説明されて面食らった。必ずしも三大師講ではないらしい。

また、仙台の三浦正弘氏は、これをサンダイミヨウ（三大名）と訛っているのを報じてきた。それを伊達・上杉・南部にたとえたものかといってきた某氏もある。

それよりもサンダイシヨウは、とかく三大将と解される。

特に早春の夕、このトリオが西の空で一文字になった印象は、「三星の横に列なれるは三将也」と中国でいわれたのを思い出させる。

たがいなぼし

わたしの甥は、隠岐島前の黒木村でタガイナボシの名を聞いた。「タガは水桶で、それをイナウ（荷う）人の形で、スマリ（スバル）より少し離れて出る」といい、図を描かせたら、横になった三つ星と、その両端から、二つずつ垂れている小さい星を描いた。

次いで島後の都万村で聞いたのでは、これはタガノバボシで、タガノバは水桶の棒のこと。三つの大きな星がならんでタガノバの形になり、左右に木のカギをつけた縄の形の子星が下がっていると説明したという。

この子星ははっきり判らないが、群馬でいうカゲサンジョ

ウ（いんきよぼし参照）の両端の星にあたるのではないかと  
思う。そしてコミツボシについては、前記島後の漁村でタカ

ノバより小さい三つの星をコタガノバボシとよび、前者とは  
すじかいの位置を描いて示したという。

この方言は、他の地方では発見されないし、島の荒浜の生  
活を眼に浮べさせる。

こみつぼし・いんきよぼし

わたしの甥が岩手下閉伊郡で聞いたのでは、「ムヅラは四  
角の中に三つある星」で、四辺形に囲まれた三つ星とコミツ  
ボシをさし、同九戸では、大いぬ座の主星（シリウス）をム  
ヅラノアトボシといって、「ムヅラから測って六寸の距離」  
といていた。

さんかくぼし・くらかけぼし

かつて、陸前阿武隈河口の荒浜村の漁夫は、わたしの甥  
に、星アテの話をしてくれて、その一つに、

沖から帰って来る時は、マツグイとサンカクをアテにす  
る。どっちも天井から少し北に下った辺を沖から山の方へ

動く。マツグイは戌の方へおさまって、二つ並んで負けずにピカピカ光る星。サンカクは亥の方角へおさまる三角がたの星だ。

と教えた。

さらに、山形県越戸のマタギ（獵人）部落で、甥が採集した星名には、

稲こきと石臼ひきは秋の収穫時から雪の下りる直前まで女の夜なべ仕事である。時計のないころは、サンカクボシの位置で見当をつけた。「サンカクサマがお入りになるから、もう仕事を休もう」などといった。

めらばしろうじんせい

なお隠岐の島後で、わたしの甥が聞いたのは、名は不明だったが、しけや荒れ前に南に低く大きな星が出る。ごく明るい星だが、これが出た後は必ずヤマシ（南）やハエ（南々西）が吹くといっていた。やはりカノープスだろう。

# （B）『星三百六十五夜』

マタギの星

5月16日

飯豊・朝日の山間、小国郷はマタギ（獵夫）の本場として聞えている。カモシカの皮の甚平に麻のたっつけ（袴）、村田銃と朱房のついた七尺ヤリを携えたのは、一時代前のことだろうが、私の甥は、その奥も奥の、戸数八戸という越戸部落の山元、熊狩の統率では神の如く崇められていた、当時八十四歳のM老人と親交があった。そして私のために、その部落に伝わる星の名を問い合わせてくれた。

すると、Aという名で、こういう返事が来た。

—星さまでは、北極星を当方では北の明星といつて、大そう崇めて、この方向には鉄砲を打たないことにしてあります。その星の北にあるたくさん星を当方では熊座と崇めて毎夜拜んでいます。山元の家では、この方角に当って不浄をさえないように気をつけております。熊祭には特にこの熊座に灯明を捧げて一同礼拝します。云々

私はこの手紙を手にして、一応は首をひねった。何よりも熊座の「座」が気になったからだ。けれど、これは北の明星（北極星）を熊獵でも北のしるべとして崇めるところから、

自然その周囲の星々に熊の名をつけたもので、大熊・小熊とは偶然の符合だろうと思ひ返した。

ところで、その翌年、甥は小国郷へ分け入って、山元を訪ねた。その時の便りがこれである。

—Aという人は、この部落で二十年からいる、六十を越した先生だったのは意外でした。字のたっしやな人が居らぬため返信を頼まれたのだそうで、熊座が果して小学読本からのものだったのにはがっかりしました。もっとも先生の教育宜しきを得るためか、八十四の山元のMじいさんまで、大熊座と小熊座とは、シチヨノホシとネノホシ附近の古来からの別称と想っているらしいのです。この二つの名を、黄いろい前歯が一本だけの老人の口から聞いた時の感じを御想像下さい。云々

私も苦笑するはかはなかった。そして、教育もよくまあ普及したものだと思つた。

# 漁船のアテボシ

6月8日

これは陸前阿武隈あぶくまの川口、荒浜村で、ある年の五月、私の甥が採訪した星の名で、昔漁船がアテとして用いたものである。話者は菱田助治郎という白髪で赤ら顔の老漁夫とあった。

—今はコンパリ（コンパスの針のこと）だが、昔は山アテと星アテを使った。星アテにする一番はキタノヒトツ、これは年中少しも動かない星。そのまわりをシツチヨーが取って喰うとて、グルグル回るのを、喰わしてはなんねえと、ヤレーの二つ星が間で防ぎながら一晩中、これもキタノヒトツのまわりを動いている。

明け方の出船はアケノミヨージンを見るが、ナカノミヨージン、ヨイノミヨージンもある。

沖から帰って来る時には、マツグイとサンカクをアテにする。どっちも天井の少し北に下った辺を、沖から山に（東から西に）動く。マツグイは戌の方角へおさまって、二つ並んで負けずにピカピカ光る大きな星、後ののは亥の方角におさまる三角形の星だ。

冬の星にはムヅラとサンデーショがある。サンデーショが明け方始めて見えるのは土用の丑の日、それから、宵に出て海から水ばなれする時刻に、イシガレイが一番よく取れる。

キタノヒトツ（ボシ）は北極星、むろん常住の星である。シツチヨー（四三ノ星）は北斗七星で、北極星をめぐる運動を、それを食べようとするところと見る地方が多い。ヤレーは鬼やらいなどの「やらい」らしい。小熊座のβ、γ二星が内側で

北極星を回り、北斗七星を追おうとするように見えるのをいう。ナカノミヨージン（夜中の明神）は木星である。

### 隠岐の島から

8月2日

おじ上様。八朔の朝、大荒れの海を島前とうぜんから渡って来ました。隠岐はすばらしい所です。土地も、人も、海の色も、星の輝きも。タイの刺身とイカ料理、到着以来お目にかからぬ日とはなく、そろそろ野菜が恋しくなってきました。島前で採集した星の名の一部を左記に――

スマル、キタノヒトツボシ（北極星）、サカマスボシ（四角で柄がついている。オリオン）、カラツキボシ（カラスキ。オリオン）、ヨイボシ、ヨナカボシ（宵の明星、暁の明星）、タガイナボシ（タガ＝水桶をイナウ人の形で、スマルより少し離れて後から出る。三つ星）。

――西郷にて 大島正隆

ここ（那久）へは昨夕津戸から移って来たばかりです。相当地峠道、島へ来ながら山登りをさせられたのには驚きました。糸でつないだお椀など奉納してある峠道のサイの神。その前からは夕陽に映えた島前の山々と、かたまったゼラチン

を想わせる穏かな海とが見渡せました。

この地は隠岐でも相当古風な方でしょう。谷底のランプの家々、この谷はフョールドの入江の如く海へ向いています。ただ一軒の宿屋、ただ一人のお客。トルストイによく出てくる隠者の如き白ひげの老主人の世話になっています。浜那久漁組合長から聞いた星の名――

タガノバボシ 三つ星。タガ（水桶）をかつぐ棒のこと。左右に木のカギをつけた縄が垂れる。

キタノヒトツボシ これは動かない。沖を走る時分、帆の耳にして目じるしにする。

シソーナナツ 四三七つ、北斗七星。これはキタノヒトツボシを中心に回る。夜通し沖に出る時、夜の更け方を見るに用いる。

よくシケ前や荒れ前に、南の方にフクク（低く）大きな赤い星が出る。ごく明るい一つ星。名前、何とか昔いったようだがと、三人とも思いつけず残念。恐らくカノーブス？

――那久にて 大島正隆

蔵王の小屋から

8月17日



十六日 嵐の山嶺を越え、宮城県側一四〇〇米メートルの小屋にたどり着きました。昨夜は八度で、暖炉をカンカン焚く寒さ、日中も相当なものでした。骨まで冷える横なぐりの霧雨を乾かそうと、地藏岳と熊野岳（一八四〇米）の鞍部、ワサ小屋の石室に入って、ゴーゴーと吠える風と、入口に渦巻く雨霧を眺めながら焚火にあたり、ただ一人いる小屋番の男といろいろ話しました。

よく聞くと、この人は山形県南村山郡東沢村宮沢の法印さんで、天平勝宝以来の家筋と称し、代々修験であったとのこと、その内に家を訪ねて文書など見せて貰う約束成立。星の探訪を少しお目にかけます。（話者は前記の人物）

ナナツボシ（北斗）。クヨウボシ（すばる）。サンボシサン（オリオン）。

星によって作物を仕付けたりなどはないが、昔は時計がなかったから、夜の時刻は杉の梢などを覚えて、その場所にサンボシサンのかかる具合で測ったものだという。

十七日 快晴 日中十八度。トドマツの原生林中の小屋に坐って、終日絶え間なき小鳥の対話と詠唱にきき入りました。コルリ、ウソ、アオゲラなどが、すぐ傍らの枝に姿を見

せ、下ではとつくになくなったキジバトやウグイスの声も響きます。

一日のフィナレは、クイナとヨタカ。夜食をすませてテラスに出ると、凄い星空、じき近くの南蔵王、杉ヶ峰の扁たい頂きには、蜩せみが這いつくばっており、その左方には、真暗な縦タンネの巨木の胴中から、怪物の眼玉の如くキラキラ光るもの、よく見れば射手座の星です。小屋の西上には、蔵王の連峰が黒々と連なり、やや東寄りの天上に天の川が流れ、その流れを横切る物の影でコーモリの存在に気がつきました。明日は登山道まで出て、下山する人にこのハガキを託します。

蔵王山の旧二高ヒュッテにて 大島正隆

ムヅラバサミ

12月27日

数によった単純な星の名は動きやすい。一ツボシは、稀れに「南ノ」を冠して、秋の南魚座のフォーマルハウトという地方があるが、主として北極星に限られているし、三ツボシはその無類の姿でオリオンの三星の占有である。しかし、二ツボシは双子座のカストールとポルクスをいうと共に、夏の蠍座こさげの尾に並ぶ二星や、時には小熊座のマスの二星をいうこともある。

四ツボシは、多く春の鳥座の四辺形をいうが、秋の天馬の

大方形をいう地方や、また、三つ星を囲む四辺形の四つの星をいう地方もある。七ツボシは主として北斗七星の称であるが、すばるを漫然とこの名で呼ぶ地方も珍しくない。

ところで六ツラボシは、むろんその星の数から出たすばるの異名で、この星の群れ以外に同じ名があるうとは予想していなかったが、私の甥は岩手県九戸郡の昔ベンザイ衆であった老人から、舟乗りの役星として、オクサ、オクサノアトボシ、ムツラ、ムツラノアトボシがまっすくな線になって次ぎ次ぎに上ると聞いた。オクサ、またはクサボシは、その地方で広くいうスバル（ムツラ）のことで、そのアトボシ（後星）が牡牛座のアルデバランであることはすぐ判った。

しかし、それにつづくムツラが判らなかつた。クサボシと重複するからである。ところが、このムツラは四角の中に斜めに三つ星があるといい、そしてムツラから測って六寸の距離でそのアトボシが上るといった。それで外へ連れ出して指ささせたところが、意外にもオリオンとシリウスであった。

その後静岡地方で、オリオンをムツガイサン、ムツボシサマ、ムツナリサンなどといい、また、房州白浜のムツボシ、埼玉のムツザも同様で、すべて三つ星と小三つ星との六星をいうものであった。

終りに、このムツラをオリオンと確定させるのは、岩手県気仙郡地方でいうムツラバサミで、これはオリオンを挟む二

つの一等星である。すばるのムツラには、それを挟む星はないからである。

### 三人の甥

12月29日

どれも良い青年で、揃ってクリスチャンだったが、次ぎ次ぎと亡くなった。

年長のAは史学者で、柳田先生の門下でもあり、民俗採訪のたんびに、私のために星の方言をせつせと採集してくれた。終りごろの手紙には、

—先日読んだ本の中で、「我々の人格と神の人格は、犬と狼星との如くに異なる」というスピノーザの言葉を見出し、面白く思いました。……この一句から、中学生の時に買って解らずに放りこんであつた『エティカ』の埃を払いました。

とあつた。そのころギリシャ語の聖書を熱心に読んでいた。

Bは最も若くして亡くなった。三年越しの闘病生活を信仰一つで貫いていたが、死ぬ半年ほど前、叔父さんだけに話す秘密と前置きして、こんなことを告白した。

前年の秋も末に、家人が寝しずまってから、Bは家を抜け

出し、死場所を求めてふらふらさまよい歩いていた。星明りばかりの郊外で、最後に家のある方角をふり返って見ると、ふと森の梢にブレイヤーデス（すばる）がぼうと青白く懸かっていた。それが目に入るなり、はッとして、夢うつつだった。氣持から常の自分を取りもどした。そしてすぐ元来た道を引き返し、こっそり病室にもどった。

「今でもどうか信仰にすがって生きているのは、叔父さんに教えていただいたブレイヤーデスのお蔭です」と彼は大きな深い目を輝かせて言った。亡くなった枕もとにも星図があった。

Cは、高等商船出のわんぱく者で、海軍少尉で南方へ出発する前に別れにやって来て、紫の袋から自慢の軍刀を出して見せたりした。そして、運送船に乗っていた友人が、東支那海で爆沈に逢い、ボートで二日間漂流したが、オリオンを見つけて方角を知り、運よく台湾の北の無人島に遭ぎつけることが出来たと話して、「叔父さん、星は単に趣味のものではありませんね」と私をたしなめるように言った。

彼は永久にガダルカナルの海底に、艦を柩にして眠っている。

（下略）